

# 親による子どもに対する指示についての会話分析的研究

日本学術振興会・奈良女子大学 戸江哲理

## 1 目的

本報告の目的は、親（主に母親）が自分の子ども（言葉を十分に話せない乳幼児）を指示するやりかたのバリエーションとそれらの相互行為上の働きを明らかにすることである。指示とは、何か（本報告の場合は子ども）に対する注意を受け手との間で確立し、それを維持するような作業のことである（Enfield 2013）。典型的には、その何か・誰かの名前を言うことやその何かを指差すことなどがある。そして指示は、単に指示された対象についての注意を確立・維持するだけでなく、それ以上の相互行為上の働きも担っている場合がある（Schegloff 1996）。

## 2 方法

上の目的を達成するために本稿は、実際に親が子どもを指示しているやりとりをデータとし、それを会話分析の手法を用いて分析する。会話分析の分析的立場は簡単に言えば、やりとりに参加している人たち自身がリアルタイムに直面している課題に定位した分析を行うというものである。データは、大阪府下の子育てひろば2ヶ所で収録した音声・映像データである。子育てひろばとは、乳幼児をもつ親（主に母親）が集まって自由に話し合ったり、子どもどうしを遊ばせたり、スタッフが提供する様々なイベントに参加したりする場所と活動のことである。

## 3 結果

約10時間のデータを確認した結果、同じ場所にいる自分の子どもを指示する場合に親は、指示表現を使用しないことが圧倒的に多いことがわかった。また使用される指示表現としては、子どもの名前や「この子」・「この人」などの割合が大きかった。このうち、たとえば「この人」という表現は、（この子どもを指示するという以外に）子どもに対する不満を言うという行為の効果を高める働きをしている場合があった。つまり、「この人」という指示表現は指示以上の相互行為的な役割を担っている。

## 4 結論

分析結果は、親が指示表現を用いて同じ場所にいる自分の子どもを指示するいくつかの場合に、指示以上の相互行為的な仕事が行なわれていることを示唆している。韓国語会話については、話し手自身と受け手への指示表現の使用自体が特定の相互行為上の仕事をしているという指摘がある（Oh 2007）。したがって次の課題としてたとえば、親が同じ場所にいる自分の子どもに対して用いる指示表現で、何の相互行為上の仕事もしていないものがないかを調べることは、比較の観点から興味深い課題といえる。

## 文献

- Enfield, N. J., 2013, "Reference in Conversation," J. Sidnell and Stivers, T., eds., *The Handbook of Conversation Analysis*, Chichester: Wiley-Blackwell, 433-54.
- Oh, S.-Y., 2007, "Overt Reference to Speaker and Recipient in Korean," *Discourse Studies*, 9(4): 462-92.
- Schegloff, E. A., 1996, "Some Practice for Referring to Persons in Talk-in-Interaction: A Partial Sketch of a Systematics," B. Fox ed., *Studies in Anaphora*, Amsterdam: John Benjamins, 437-85.